

## 外部評価委員コメント

令和6年5月18日

金城大学短期大学部幼児教育学科 教授 中村明成

今回は、毎年出されているひまわり教室に通われているお子さんの保護者の手記をまとめた『みちのり』とその中でも記されているひまわり教室の活動の様子を読みときながら、コメントしたいと思います。

児童発達支援の事業所として、ひまわり教室は位置づけられています。ガイドラインにはその目的として、(1) 障害のある子ども本人の最善の利益の保障 (2) 地域社会への参加・包容 (インクルージョン) の推進と合理的配慮 (3) 家族支援の重視 (4) 障害のある子どもの地域社会への参加・包容 (インクルージョン) を子育て支援において推進するための後方支援としての専門的役割の4つが挙げられています。

### 子どもへの「ほいく」(ひまわり教室の一日から)

朝のあいさつでは「…挨拶の時間が好きなMちゃん。なまえよびの「ここです、ここです、ここにいます♪」と歌が始まると、ニコニコの笑顔で両足を伸ばし、体全体で楽しさを表します。リーダーがMちゃんの顔を見ながら名前を呼ぶと、手を動かし、笑顔や声を出して返事をします。お友達がリーダーの真似をしてMちゃんの手タッチしたり、ほっぺたを触ったりすることもあります。そんな子どもどうしの関わりも大切にしています。」とありました。

ここから見えてくることは、子ども一人ひとりがどうその時間を楽しめているか、その楽しみにスタッフがどう関わっているか、他の子どもとの関わりも、子どもどうしの関係の中でどうやり取りが成立しているかの視点だと考えます。「障害のある」子どもには、よく発達保障 (どんなにしょうがいの「重い」子どもでもその発達を保障する) という理念が言われていますが、ともすると「発達保障のために」子どもが過ごすその瞬間の心の動きや感情といったものが後回しにされていないかと、私自身も振り返ることがありますが、ひまわり教室では、まずはその子どもの生き生きとした表情や些細なしぐさから、より子どもの気持ちを読み取ろうという姿勢の大切さを感じ取れます。そのことは、Kくんの型はめパズルの活動の記述や、Hくんの積み木の活動でも「子どもの見方」として貫かれています。

### 「かぞく」・「ほごしゃ」への支援（家族・母親の手記から）

現在のような様々な福祉サービスがなかった時代から、ひまわり教室は、そのお子さん・ご家族に合わせた支援を行ってきました。それは子ども・家庭と十分相談しながら、柔軟に対応してきたことに他なりません。ご家族の手記からも「家族を支える」ことの大切さが伝わってきます。

Yちゃんのお母さんは、「…あくまで、私たち家族が感じていることですが、苦勞の多さは不幸と比例しない、ということです」と記されています。お子さんが生まれて、誰もが絶望や悲観を感じながら、目の前のお子さんを見つめて、一步一步歩みを進めている中で、わずか数年の時間ですが、このように周囲へ伝えている姿があります。それには、周りの人々がどんなことがあってもサポートしてくれる。家族・特に母親父親が抱え込むことはないというゆるぎない信頼があるからではないかと思えます。そしてこれはひまわり教室に通っている間だけではなく、ひまわり教室を「卒業」してからもずっとつながり続けていけるという確信からくるものではないか感じられます。Hくんのお母さんは「…Hの姿を通して、たとえ障害があっても寄り添ってくれる人が必ずいるということ、互いに支えあうことで同じ場所で生きていけるし、みんな一人ひとりがお互いを認め合うことが思いやりになり、障害がある人もない人も一緒に生きていくことにつながるのだと感じました」と書かれています。

「はじめに」でYちゃんのお母さんは「…娘と過ごす日々は難しい選択に迫られることもあり、健常児の子育てと異なる大変さもあります。でも細やかなことの素晴らしさや有り難さに気づき、心から喜んだり、笑ったり…人生が色濃く鮮やかに変化したことを感じます。そして、その変化は娘がひまわり教室に通い始め、沢山の子ども達と先生方に出会えたことで、より鮮やかさを増したように感じています」と記されていることから、お母さん自身の「ものの受け取り方」「生き方」も変えていく「ちから」がひまわり教室に通っている子ども一人ひとりにあることを物語っていると、私は確信しています。

### 次へ向かって（地域社会への参加・包容（インクルージョン））

ひまわり教室では、子どもの安心・家族の安定の見通しが立つことを前提に、交流保育や併用保育、いずれは地域の「保育施設」への通園を前提に、子どもを保育しています。

N君のお母さんは「…息子の為に色々なコミュニティに属し交流することも必要だろうと思い、通園を決めました。自宅ではしないことをひまわり教室では見せてくれて、その報告を聞くたびに嬉しく思い、夫婦共に毎日の連絡帳や送迎時の先生からのお話がすごく楽しみになっています。今のNが元気に楽しく過

ごせるのは先生方やお友達のおかげにほかならず、とても感謝しています」とあり、ひまわり教室での関わりが今後のステップになる期待が感じられます。

Yちゃんのお母さんは「…今度は幼稚園に通わせようと思い、いくつかの園に問い合わせてみました。1件2件3件…何件もかけましたが「受け入れは難しい」と断られました。(中略) まわりのママさんたちが積極的に保育園を考えている姿を見て話をしているうちに、「このまま後ろを向いてちゃいけない！前を向かないと！」と思い直し、幼稚園探しを再開しました。(中略) その中で御縁のあった幼稚園に入園することになりました。(中略) 副園長先生が対応してくださったのですが親身になって下さり今後の就学の不安もお話した時に「一緒に考えていきましょう」とおっしゃってくださいました。何気ない一言でしたが、とてもうれしく思いました」と綴られています。

「ノーマライゼーション」から「インクルージョン・インクルーシブ保育・教育」へと社会では考えられている時代ではありますが、まだまだ受け入れ先にも様々な課題があり、一つひとつ言葉を重ねながらお子さんの世界が広がるための努力が必要でもあります。普段、「保育施設」での統合保育や支援が必要なお子さんの相談に関わっている立場から力不足も感じていますが、もっともっとひまわり教室に通っているお子さん以外でも、「どんな子どもでも共に育つ・共に生きる」社会になるように関わるすべての皆さんと力を合わせながら、微力ですが努力していきたいと改めて感じています。

#### さいごに（能登半島地震から5か月たって）

2024年1月1日元旦の夕方、金沢でも大きな揺れが感じられ、奥能登を中心に多くの方が亡くなられたり・大きな被害が出たりしました。今もまだまだ元の暮らしに戻ることが困難な状況が続いています。そういう時だからこそ、『みちのり』に綴られた一人ひとり、一つひとつのことばを思い返しながらか「ひととひとが支えあって生きていく」ことの意味を、みなさんで考えていく必要があるのではないかと、能登で生まれた私自身も感じています。今後もひまわり教室の歩みが変わらず進めていけるように、願っています。

\* 『みちのり』はひまわり教室にあります。